吉江の里

さばえ近松倶楽部

明暦元年（一六五五）、松平昌親が吉江藩主として入部するに伴い、四六名の付け人が入部したが、その中に近松門左衛門の父、杉森信義の名がある。

近松門左衛門は、承応二年（一六五三）に出生、当時は二歳（数え年で三歳）の幼子で、幼名を「次郎吉」といい、その後約一〇年間を両親と五人の兄弟と共に春慶寺山の麓近く、吉江の地で暮らすことになった。

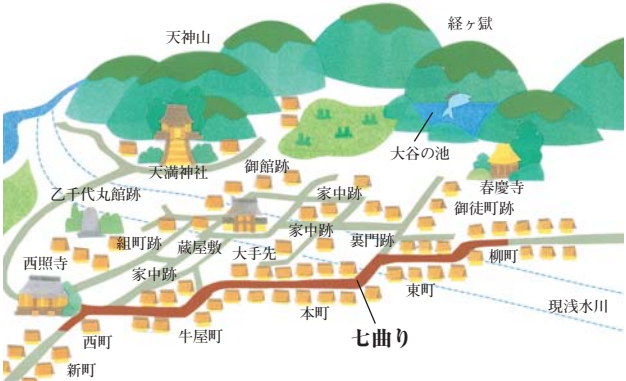
「次郎吉」の暮らしぶりを想像しながら、

信長の焼き討ち遁がれし春慶寺の
山号顕たせて夕光ただよう
（春慶寺にて）

春慶寺

吉江の里を散策してみよう。

うららかな春のある日、一〇歳になった次郎吉は早朝鶏の鳴き声で眼を覚まし、慣れ親しんだ近くの春慶寺山に向かった。中腹にある春慶寺へと続く緩やかな参道の脇には竹林が生い茂り、登り口の地蔵堂には笏谷石で彫られた六体の地蔵尊が安置され、頭巾と輪袈裟の朱色がひときわ鮮やかである。春慶寺の境内には樹齢千年とも推定される杉の木が天を押し上げている。ほどなく着いた山頂から吉江の里を眺めながら、自分の将来に思いをめぐらした。父のよう



吉江藩城下町跡想定図

旧吉江城下のたたずまい（吉江七曲り通り）

に吉江藩士として奉公するのであろうか。それとも…。まだ何も確たる思いではないが、幼いころに母につれられて一緒に見た幸若舞（こうわかまい）が頭の隅に残っており、春霞のように脳裏を去来する。次郎吉の胸の中はいまだ五里霧中であった。

春慶寺山は、春はさくら、秋にはもみじ狩りが楽しめる自然の楽園である。その中腹に建立された春慶寺は、正保（しょうほう）二年（一六四五）頃「春日山春慶寺」の山号を賜っているが、その起源については飛鳥、奈良時代にまで遡（さかのぼ）ると

も推定されている。無住の寺となった今でも、「シュンケッサン」と親しまれ、檀徒(だんと)によって毎月「講」が勤められており、住民の心の拠(よ)り所となっている。

次郎吉は境内の杉の大木に登り、日野の流れのきらめきや、遠く広がる田園風景を眺めていた。春慶寺は近松門左衛門が成育していく

近松の里ー立待地区ーの活動

吉江の里で過ごした近松を後世に伝え、立待地区の文化の振興に資するため、立待公民館が中心となり、さまざまな活動を展開している。

昭和52年（1977）	近松の命日（11月22日）に俳句会を開催（近松門左衛門奉賛会）
53年	立待公民館横に近松門左衛門文学碑を建立
平成５年	『近松門左衛門と吉江藩』発行
10年	第1回「たちまち近松まつり」開催 毎年「真桑の人形浄瑠璃」（岐阜県真正町、国指定重要無形文化財）を公演
13年	「立待近松の里づくり事業推進委員会」発足
14年	吉江町の公民館前に近松門左衛門像を建立 「たちまち近松人形劇団」創立（立待小学校児童） 第5回「たちまち近松まつり」で創作劇を旗揚げ公演

上での「原風景」として大きな意味を持つと同時に、人間形成に強い影響を与えたであろう。

次郎吉は学問にも励み、古老達が話す吉江の遺跡についての話を好んで聞いた。夜のとばりがおりると、行灯（あんどん）の灯のもとに机に向かって、日頃聞く吉江神社の故事来歴を一人頭の中で思いめぐらしながら眠りにつき、夜が明けると学問所

さばえ近松（ちかまつ）倶楽部（くんぶ）のあゆみ

平成８年（1996）　さればでござる近松講座　開講

福井大学教授三好修一郎氏の軽妙な語りが受講生を魅了、平成10年まで継続。その後、この講座による近松顕彰への市民活動の高揚を、このままにしたくない、と愛好家が集い、『さばえ近松倶楽部』として活動をスタート。

11年　『さばえ近松倶楽部』発足

活動内容　年数回の講座開設、文楽・歌舞伎の鑑賞、自主学習会、機関紙の発行など

長門市視察交流会

12年　『さばえ近松ものがたり』刊行

近松ゆかりの地交流事業（鯖江市・長門市・尼崎市）

13年　『ちかまつうるる読本』（３冊シリーズ）刊行

に行って、熱心に先生の講義を聞く学問好きな少年であった。そのかたわら、俳句を嗜むようになっていた。

次郎吉はまた、学問所からの帰路、吉江七曲り通りを、足駄の音を響かせながら袴の裾を蹴上げて通り抜ける闊達な少年であった。

吉江七曲り通りは、吉江藩の城下町の名残で、この辺り一帯の家の地割りや、道路の区画はほとんど当時のままであると言われている。「七曲り」の名のとおり、道路は七つの鉤型に曲りながら、柳町・東町・本町・牛屋町・西町・新町の六つの町並みを貫いている。

江戸後期、今から約二〇〇年前には、一七〇軒の屋敷が並び「小江戸七曲り」とも呼ばれたそうだ。当時は吉江藩の家臣達や馬が通り、米や野菜を積んだ大八車が「ガラガラ」と音をたてながら往来していた。今でも昔の面影を残す立派な黒塀と門構えの家が残っている。その辺りの情景をながめると、めまぐるしい日常から隔てられ、異次元の世界に身を置くような、不思議な安堵

感に充たされてゆくのである。

時は流れ、藩を辞した父は一家を引き連れて京都に移るが、次郎吉はその頃には立派な文学青年に成長していた。

次郎吉が十九歳の頃に作った俳句に次の句がある。

しら雲や　はななき山の　恥かくし

そして京都に移り住んでからの次郎吉は、公家奉公の経験の後、文学的才能が開花し、浄瑠璃、歌舞伎作者としての名をほしいままにし、元禄三大文豪の一人として、浮世草子の井原西鶴、俳諧の松

近松門左衛門文学碑（立待公民館）

尾芭蕉と並び称される。

鯖江市では近松が幼少年期を過ごしたゆかりの地として、昭和五十三年、立待公民館横に記念碑庭園を造り、近松の辞世文が記された碑や、水上勉氏揮毫の『近松門左衛門先生由縁之地』と記した顕彰碑を建立した。

この碑と対面するとき、近松研究者の大阪市立大学教授森修（もりしゅう）氏の「解説文」によって、この吉江の地が近松ゆかりの地であることのお墨付きの意味が脈々と伝わってくるのである。